

逆接型 シカシとダガの意味分析試論 : 朝日新聞「社説」を資料として

著者	塩澤 和子
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	43
ページ	1-21
発行年	2003-03-30
その他のタイトル	Meaning analysis in conjunction : shikashi and daga
URL	http://hdl.handle.net/2241/9776

逆接型 シカシとダガの意味分析試論

—— 朝日新聞「社説」を資料として ——

塩澤和子

1 接続表現の研究の現状

従来、文章論の研究において接続表現⁽¹⁾は、文と文、文と連文などをつなぐ働きをもち、文脈展開の流れをたどる上で重要な機能を担っている言語形式の1つと位置付けられる。時枝誠記（1950）は「文章の構造的性質は…思考展開の表現にある」と見て、接続詞を「文章展開の重要な標識」と見なす。それは「接続詞が辞に属し、話手の思考の展開の直接的表現であるから」という。そして代名詞とともに、文章の展開を表現するものとして「最も重要な役割を果たす」と指摘する。市川孝（1978）は「接続詞の中心的機能は、文と文との関係を示す点にある」のだから、「文と文と連接関係に及ばなくてはならない」と述べ、前文と後文との間にどのような意味関係が見出されるのかを基準に「三類七種」に分類する。「1①順接、②逆接、2③添加、④対比、⑤転換、3⑥同列、⑦補足、」である。また永野賢（1986）は、接続の意味関係から「展開型、反対型、累加型、同格型、補足型、対比型、転換型」の7分類と3文間の関係を表す「飛石型、積石型」の2分類を行っている。

この他、塚原鉄雄（1969）、佐治圭三（1987）、田中章夫（1987）なども、分類の観点、用語、種類などに相違はあるが、接続詞を意味、用法によって類別することを試みている。これらの研究は、文と文との意味上の関係を類別する上では参考になるが、しかし実際の文章を分析の対象とする際には、意味的類型と言語形式が必ずしも一対一で対応しているとは限らず、言語形式によっては類型の枠に当てはまらない場合も出てくるため、類型を参考に分析をすると実際にそぐわない場合も出てくる。

佐竹久仁子（1986）は、類型化によって生じる問題を取り上げ、語によっては広い範囲にわたって行われる意味関係を一つの枠の中に押し込め、その表す意味関係を限定してしまう恐れがあると指摘する。例えば「シカシ・ガ・ケレ

ドモの類の接続詞は」、逆接関係を表す接続詞として分類されるのが一般的だが、「それは用法の一部で、実際は逆接におさまらずもっと広い範囲で使われている」と述べる。佐竹は逆接の接続詞を取り上げ、現代語における用法を統一的に説明することを試みているため、例えばシカシの意味も多様であることが確認される。

実際、逆接型のシカシなどは意味の広がりが大きく、岩澤治美(1985)が「逆接の接続詞の用法」で指摘するように、本来の逆接型(筆者注、論理学でいう「A対否A」の関係)の他に、対比型、添加型、補足型、転換型などの用法も観察されるという。この点を考慮すると、類型化とは別に、接続表現の個々の語に関する意味・用法の詳細な記述は、実際の文章分析に際し、文と文との意味上の関係を正確に把握し、文脈展開の流れを観察する上で不可欠な要件であるといえる。

現在、個別の接続詞を取り上げ、意味用法を詳細に記述しているものに、森田良行(1980)がある。森田は接続詞を関係性によって意味分類せず、個別に見出しを立て、個々の語の分析、意味用法の説明を行っている。語によっては史的背景の説明もある。また比毛博(1989)は、「接続詞の体系性の発見をめざして」^(註2)個別の接続詞を取り上げ、意味と機能の記述を詳細に行っている。体系性の発見をめざしているため、意味関係を基に5つに分類している点で、類型化による意味の限定という問題を残してはいるが、豊富な用例による説明は参考になる。

また接続表現全体にわたってはいないが、1語または同一類型内の2語を取り上げ、比較対照することにより意味・用法の違いを論じたものがいくつか散見する。逆接に関しては、赤羽根義章(1996)、沖裕子(1995)、北野浩章(1989)、北條淳子(1994)などがある。このうち赤羽根義章は、逆接の接続詞として「しかし」と「ところが」を取り上げ、両者の意味用法を捉えることを目指しているのが注目される。赤羽は、「逆接の接続詞、接続語句を後文の文末ムード形式の制約から二分し」て、「全文と後文の文末ムード形式に着目しながら後件の前件に対する関係のあり方を記述すること」によって、シカシとトコロガの意味・用法の相違を論じている。ここでは「『しかし』と同じく後文の文末ムード形式の制約を受けない接続詞、接続語句」として「けれども・だが・だけども・でも」などを挙げ、「『ところが』と同じような制約を持つものには「それが・それなのに・それにもかかわらず」などがある」とし、シカシのグループとトコロガのグループに二分して考察している。

現状の接続表現に関する研究を見ると、文章の展開に関する研究を進めていく上で参考となる文献、特に個別の語の意味、用法を詳細に記述した文献が意外に少なく、本稿で取り上げるシカシとダガの相違に関して論究したものは、管見する限りでは見当たらなかった。そこで本稿では新聞の社説を資料として、逆接型の接続表現、シカシとダガを取り上げ、両者の意味、用法の特徴を明らかにしたいと考える。

2 新聞の社説に見る逆接型

逆接型の意味関係について、幾つかの説を見ておきたい。市川孝は「文の接続関係の基本的類型」で「逆接型」を「前文の内容に反する内容を後文に述べる型」と説明し、更に意味を3分類し、種類を例示する。

〔反対、単純な逆接〕＝しかし・けれども・だが・でも・が」といっても・
だとしても（以上、仮定的な意）

〔背反・くいちがい〕＝それなのに・しかるに・そのくせ・それにもかかわ
らず

〔意外・へだたり〕＝ところが・それが

永野賢は逆接関係を示す反対型について「前の文の内容に対し、あとの文でそれと反対の事からを述べる関係」とし、「だが、しかし、でも、ところが、それなのに」を例示する。また『ケーススタディ』では市川説を参考に、「前の内容から予想されることに反する内容を後に述べる」と説明し、下位区分をせず接続表現の例を挙げている。ここには市川孝には挙がっていない例「ですけれども・とはいえ・とほいうものの・しかしながら・だからといって」も含めている。

本稿では、以上の文献例を参考に接続表現の認定を行うことにする。

調査の対象として朝日新聞の社説1ヶ月分（平成14年1月1日～1月31日）を選び、そこから社説50回分を得た。社説は1日に2種の社説（各1100字前後）が掲載される場合と、1日1種（2100～2200字前後）だけ掲載される場合がある。字数の長短に関わらず、1タイトルを1回とカウントする。

まず50回分の社説に出現する接続表現は、〔表1〕のようである。接続表現の分類は、『ケーススタディ 日本語の文章・談話』を参考にした。類型ごとに分類し、（ ）内には頻度を記す。なお考察する際は、接続表現をカタカナで表記する。

〔表1〕接続関係の種類と接続表現の種類・頻度

類型	種類	異り語	述べ語
1 順接型	それには(1)・それ故(1)・だから(2)	3	4
2 逆接型	けれども(1)・しかし(35)・それが(1)・それなのに(1)・だからといって(2)・だが(31)・でも(7)・ところが(6)・とはいえ(5)・なのに(1)	10	90
3 添加型	しかも(2)・そして(6)・それから(2)・それに(1)・同時に(3)・また(4)	6	18
4 対比型	あるいは(2)・一方(で)(4)・いわんや(1)・逆に(2)・その一方(で)(2)・その代わり(1)・それとも(1)・他方(で)(2)・むしろ(3)	9	18
5 同列型	たとえば(12)・つまり(1)・とくに(2)・とりわけ(2)	4	17
6 転換型	それにしても(1)・では(1)	2	2
7 補足型	ただし(1)・もともと(1)	2	2

異なり語で頻度の高い順から、逆接型10、対比型9、添加型6、となっており、その他は、2、3種類程度でしかない。異なり語と対応して述べ語でも同様に上記3種類の頻度が高いが、このうち対比型、添加型は同数の18であるのに対し、逆接型は90と、群を抜いて頻度の高い点に注意される。ただしこれは逆接型全体の頻度が高いというわけではなく、そのうちの2種、シカシ、ダガの頻度が高いことと関係する。個別に見ると、タトエバ12、デモ7、トコロガ6、ソシテ6などが比較的頻度の高い方に属し、それ以外は1、2回程度の出現でしかないが、そういう傾向の中で、シカシ35、ダガ31は、他の追従を許さないほど高い数値を示しているのである。シカシとダガは社説を特色付ける接続表現と評してもよいかと思う。

ただし、シカシまたはダガが毎回社説に出現するわけではなく、1回も出現しない社説もあれば、別個に出現することも、共存することもある。中には、シカシ4、ダガ2、などと頻出する社説もある。今仮に両者を合計した66回を1ヶ月分の社説50回分で割ると、一回の社説に平均1.32回の出現となる。計算上は1回分にシカシまたはダガが必ず1回は出現する結果となる。月に数例程度しか出現しない接続表現に比べると、社説ではシカシ、ダガをいかに重用しているかがわかる。

論理的文章の代表格とも言える社説で、シカシとダガが共に逆接型の代表として頻用されている結果を考慮すると、両者は各々別個の意味機能を担う接続表現として文章の展開に関与していることが推測される。そこで実例を分析し、社説でのシカシとダガの意味・用法の特徴を明らかにしたいと考える。

3 逆接型 シカシとダガの意味分析

ここでは、シカシまたはダガによって関係づけられる前件と後件の言語形式、特に〔提題表現＋叙述表現〕という文構造に注目して、意味分析を行う。従来、意味分析は筆者の主観的判断のもとに行われることが多いため、例文と意味との関係が判然としない場合もある。そこで本稿では意味関係を客観的に把握することを目指し、言語形式を手がかりに意味分析を行うことにした。特に前件と後件の叙述表現は意味分析の重要な観点とした。言語形式の認定にあたっては、『ケーススタディ 日本語の文章・談話』（提題表現は佐久間まゆみ担当、叙述表現は野村真木夫担当。考察に際し「ケース」と略す）、永野賢『文章論総説』を参考にする。

「ケース」では、叙述表現を機能によって3分類する。

1 客体的表現（対象を素材的に描写する表現）

：動詞・形容詞終止形の零記号、タ（過去・完了）、テイル、ナイ（動詞・形容詞の否定）」

2 主体的表現（文章の書き手・話し手が対象を一定の主體的な態度で規定する表現）

：ダ、ラシイ、ヨウダ、ダロウ、ウ、マイ、ノダ、ワケダ（以上、「判断、推量、意志、説明」の表現

3 通達的表現（文章の読み手・聞き手に働きかける表現）

：疑問・勧誘・依頼・禁止の形式、動詞の命令形の零記号など

客体的表現は、永野賢の「客体的事象の叙述」、主体的表現は「主体的立場の陳述」、通達的表現は「読み手への働きかけ」に各々相当する。なお「主体的立場の陳述」には、永野は上記の例の他に「だった（回想）、ます、そうだ（推定・伝聞）、かもしれない、ものだ、はずだ、た（確認）、ある（肯定判断）、ない（否定判断）、のである、のだろう、のです、のでしょうか、たろう」などを挙げ、さらに〔別表〕に「ざるをえない、ことがある、…以下略」なども列

挙する。

ここでは以上の分類を参考に、叙述表現を手がかりにして、「客観的事象の提示」（客体的表現）と、「主観的見解の表明」（主体的表現）とに2大別し、前件と後件との関係から4つの組み合わせを設定する。なお通達の表現は独立させず、主体的表現に含めて扱うこととする。

次に後件の叙述表現に「肯定形（否定形）」、「疑問形」が観察される場合は、下位区分して各々検討する。考察の都合上、肯定形と否定形を分けて検討することもある。

上記の分類とは別に、後件に条件従属節が観察される場合は、機能によって前件と後件の叙述表現を分類せず、一括して扱うことにした。

また前件と後件の間に対比関係が観察される場合も、独立させて検討することにした。以上のいずれにも該当しない例は、「その他」として処理する。

以上、分析の観点を整理すると、次のようになる。「前件 - 後件」の関係を表す。

- | | | |
|---------------------|---|-----------------|
| 1 客観的事象の提示（客体的表現） | - | 客観的事象の提示（客体的表現） |
| 2 客観的事象の提示（客体的表現） | - | 主観的見解の表明（主体的表現） |
| 2. 1 後件は肯定形（否定形） | | |
| 2. 2 後件は疑問形 | | |
| 3 主観的見解の表明（主体的表現） | - | 客観的事象の提示（客体的表現） |
| 4 主観的見解の表明（主体的表現） | - | 主観的見解の表明（主体的表現） |
| 4. 1 後件は肯定形 | | |
| 4. 2 後件は否定形 | | |
| 4. 3 後件は疑問形 | | |
| 5 客観的事象の提示／主観的見解の表明 | - | 条件節 + 主観的見解の表明 |
| 6 対比的関係 | | |
| 7 その他 | | |

以上の分類をもとに、シカシとダガの用例を7項目に分類する。そして項目ごとに同一条件の中において両者間に相違が見出されるか、見出されるとしたらそれはどのような形式に顕著に現れてくるか、その点に注意しながら考察を進めていく。そして社説という論理的な文章の展開において、シカシとダガが果たす役割、意味関係の特徴を整理したいと考える。

3・1 客観的事象の提示 — 客観的事象の提示

前件には過去や現在の事柄が客観的に提示される。また後件でも前件同様、過去や現在の事柄が主観を交えずに客観的に提示される。この二つの事柄がシカシ／ダガによって関係付けられるが、叙述表現は両方とも客体的表現を取る。(1)(2)にシカシ、(3)(4)にダガ(いずれも太線、下線を付す)の例を示す。叙述表現には下線を付す。文例の最後に()で日付を記す。以下同じ。

- (1) 「国連障害者の十年」が終わった翌93年、日本では障害者基本法が成立し、国や地方公共団体には障害者の福祉を増進する責務がある、と明記された。94年には障害者や高齢者が利用しやすい建築を促すハートビル(心優しい建物)法が、00年には駅にエレベーターなどを整備させる交通バリアフリー(無障害)法ができた。
しかし、これらの法律には障害者の権利の明確な規定はなく、障害を理由に特定の場に囲い込むような政策がいまだに続いている、という不満が当事者にはある。(1.28)
- (2) 作家サルマン・ルシュディ氏のように「宗教を個人の領域に返し、非政治化することは、すべてのムスリム社会が近代化するために取り組みなければならぬ課題だ」と言い切る人はなお少ない。しかし、タリバーンとアルカイダの敗走で、イスラム諸国のリベラル派が息を吹き返している。(1.3)
- (3) 今回のセラチア菌は、適切な抗生物質で退治できる。だが、菌を突き止める検査に時間がかかり、その間に急速に症状が悪化して死亡した患者が多かった。(1.20)
- (4) 日米安保体制はアジア太平洋地域の安定や日本の経済発展に一定の役割を果たしてきた。だが、どんな同盟にも寿命がある。(1.30)

(1)では、前件を[提題表現+叙述表現]の構造で観察すると、「障害者基本法が + 成立し、(障害基本法は) + 明記された。」「ハートビル法が・交通バリアフリー法が + できた」と、客観的事象として日本で成立した障害者のための法律3種を提示する。シカシのあと後件では、前件で例示した3種の法律を「これらの法律には」と、コ系の指示表現を使って捉え直し、「これらの法律には・明確な規定は + なく、…という不満が・当事者には + ある」と、これらの法律のもつ問題点を提示する。(2)では、前件で作家サルマン・ルシュディを例に『「宗教を…」』と言い切る人は + 少ない」と、ルシュディ派は少

数でしかない現実を提示する。シカシのあと後件では、前件の提題表現を「リベラル派が」と捉え直し、説明部分を名詞によって概念を固定化させている。そして「リベラル派が + 息を吹き返している」と、少数派ではあっても悲観的状况ではなく息を吹き返している現状を提示する。

(3)では、前件で「今回のセラチア菌は + 退治できる」と、自明の事実を提示し、ダガのあと後件では、「(今回は)時間が + かかり…患者が + 多かった」と、検査に時間がかかったため、「退治できる」という事実が今回は十分に生かされなかった結果を提示する。(4)では、前件で「日米安保体制は + 役割を果たしてきた」と、一つの歴史的評価を提示する。ダガのあと後件では「安保体制」を含めた同盟一般という見地から「どんな同盟にも + 寿命がある」と、一般的見方を提示する。

以上のように、シカシもダガも、前件、後件ともに客観的事象を提示している点では共通するが、提題表現は相違する。シカシでは前件後件の提題表現が類義的關係にあるため、前件と後件は同一対象に対して観察される相反する事象を提示する関係と見なせるが、ダガでは、提題表現が一般と特殊の關係(セラチア菌の退治法と今回の事例)、特殊と一般の關係(安保体制と同盟一般)となっているため、前件と後件は異なるレベルにおける相反する關係にあると見なせる。

3・2 客観的事象の提示 — 主観的見解の表明

3・2・1 後件は肯定形(否定形)

前件で過去や現在の事柄を客観的に提示し、後件では筆者が主体的表現で見解を表明する形を取る。後件の叙述表現は、シカシでは筆者が見解を断言的に表明する形式が観察されるが、ダガでは、婉曲的、譲歩的に見解を表明する形式が観察される。(5)(6)はシカシ、(7)(8)にダガの例を挙げる。

- (5) 多くの不祥事に対処するため設けられた「警察刷新会議」の一昨年7月の提言では、第三者による外部監察の導入は捜査の秘密性を理由に見送られた。しかし、今回の事件でもわかるように、警察には自らの不祥事にきちんと対処する能力がないことは明らかだ。この組織の再生には外部監察が必要不可欠である。(1.24)
- (6) 同時多発テロ以後、世界経済が不況色を強める中で、これだけの支援をすることはどの国にとっても重い負担となる。しかし、アフガンを再びア

ルカイダのようなテロ組織の巢にしないためにも、国際社会はこの国の復興をおろそかにすることはできない。共同議長国の日本としても、最大限の支援を表明すべきである。(1.20)

- (7) 日米安全保障条約の調印から半世紀がたった日米同盟とは違って、日英同盟は締結から20年で解消した。だが、日米同盟を考える上でも、日英同盟から引き出せる教訓は今でも少なくないように思う。(1.30)
- (8) もみ消しを放置したのは、警察組織につきまとう隠ぺい体質に根ざしたものでなからうか。

本部長ら幹部がどこまで事情を知っていたかは、まだ解明されていない。だが、これまで神奈川や新潟、富山などの各県警で露見したさまざまな「もみ消し事件」と同根とみられる。(1.24)

(5)では「外部監察の導入は + 見送られた」と、まず事件の顛末を客観的に提示した上で、シカシのあと後件では「今回の事件でもわかるように」と例示し、「警察には…能力がないことは + 明らかだ」と決めつける。さらに「外部監察が + 必要不可欠である」と断言する。(6)も同様で、「これだけの支援をすることは + 負担となる」と、まず客観的に現状を提示した上で、筆者は「テロ組織の巢にしないためにも」と目的を示し、「国際社会は + おろそかにすることはできない」と断言する。

(7)では前件で「日英同盟は + 解消した」とまず客観的に歴史的事実を提示した上で、ダガのあと後件では「日米同盟を考える上でも」と目的を示し、「教訓は + 少なくないように思う」と譲歩する形で見解を表明する。(8)でも「事情を知っていたかは + 解明されていない」とまず客観的に現状を述べた上で、後件で「(今回のもみ消し事件も) + (過去の一連の事件)と同根と見られる」と、婉曲的に表明する。

シカシでは、後件の叙述表現は「明らかだ・…することはできない・…できないというわけではない」などと現れ、積極的に意見を主張する姿勢を表すが、ダガでは「…少なくないように思う・…と見られる」などと現れ、譲歩的に見解を表明する姿勢をとる。

3・2・2 後件は疑問形

前件で過去や現在の事柄を客観的に提示し、後件で筆者が見解を表明し、その見解の妥当性を読み手に問う形を取るとき、疑問形をとる。シカシでは後件

の叙述表現が肯定形に終助詞「か」を伴う形式をとるが、ダガでは否定形に終助詞「か」を伴って現れる。(9)はシカシ(1例のみ)、(10)(11)はダガの例。

- (9) 志願者が学校を選ばなければ、全員が入学できる「大学全入時代」を迎えようとしている今、研究だけでなく、学生の教育にも力を入れてもらいたい。

ほとんどの大学が学生による授業評価を受けている。しかし、その結果をきちんと公開しているだろうか。授業方法の研修や講義の公開などの試みも盛んだが、実際に改善に役だっているか、自ら検証しなければならない。(1.28)

- (10) エンロンは、規制緩和と市場経済の波を機敏にとらえることで、米国7位の大企業に急成長したとされてきた。

だが、米政府や議会への政治献金がエネルギー政策をゆがめ、同社に有利に働いたことはなかったのだろうか。まずこの点が解明されなければならない。(1.30)

- (11) 経済界では、社外取締役にふさわしい人材を見つけるのが難しいという声が高い。だが、実務経験に富み、判断力のある企業人やそのOBは少なくないのではないか。人材発掘の努力を忘れ、社外取締役を気心の知れた友人などで固めてしまえば、相変わず限られた人たちで会社を牛耳ることになりかねない。(1.21)

(9)では、前件で「ほとんどの大学が + 評価を受けている」という事実を提示し、後件で「(ほとんどの大学は) + 公開しているだろうか」と、筆者は前件で把握した事実から当然予想される事柄を「公開している(肯定形)・だろう(推定判断)・か(疑問)」と捉え、読み手に疑問を提示する。

(10)では前件で「エンロンは + 急成長したとされてきた」と、エンロンの急成長という事実を提示し、後件で「(エンロンの) 政治献金が + 有利に働いたことはなかったのだろうか」と、前件から予想される内容について「なかった(否定形)・のだろう(推定判断)・か(疑問)」と、読み手に疑問を提示する。(11)も同様に、前件で「経済界では + 声が高い」という事実を提示し、後件で「判断力のある企業人やそのOBは + 少なくないのではないか」と、「少なくない(否定形)・のではない(断定・否定形)・か(疑問)」と、読み手に提示する。この他に「同時多発テロが映し出したのは + 意外なもろさ、

ではなかったか (1.8)」という例もある。

シカシでは、後件の叙述表現が肯定形「受けている」となるに対し、タガの後件は「働いたことはなかったのだろうか・少なくないのではないか・もろさではなかったか」など、否定形をとる。

3・3 主観的見解の表明 — 客観的事象の提示

前件で筆者は、相手の立場を一応肯定する態度を表明するが、後件では前件に対立する事実を客観的に提示する。この例は全体的に少なかったが、(12)(13)にシカシ、(14)にタガ(1例のみ)の例を挙げる。

(12) 紀伊半島南の七里御浜は20キロ余りの砂浜が続く、吉野熊野国立公園の名勝だ。しかし、幅が200メートルもあった浜は波にどんどん削り取られている。(1.16)

(13) 日本医師会の坪井栄孝会長は、救急車には医師が乗るべきで、現場近くの開業医が合流すればよいという。しかし、医師が乗り込む「ドクターカー」は現状では数がごく少ないうえ、主に病院から病院へ患者を移すことに使われている。(1.10)

(14) 預金の払い戻しができなくなる恐れがある金融機関は退場願う。大銀行から中小まで、網の目のようにつながった金融のシステムを守るためには、やむをえない措置なのであろう。

だが地域金融機関をめぐる現実はいたく厳しい。地場産業は先細り、かつてにぎわった商店街は地盤沈下した。工場も中国などに移転し、後には失業が残る。(1.13)

(12)では前件で「七里御浜は + 名勝だ」と七里御浜に対する評価を断定的に述べ、シカシのあとの後件では「浜は + 削り取られている」と、前件と同一の対象に対し、前件とは相反する現状を提示する。(13)では、前件で「坪井栄孝会長は + 『救急車には・医師が + 乗るべきで…開業医が + 合流すればよい』という」と、会長談話を伝聞の形で紹介し、シカシのあとの後件では、前件の談話内容に反する現実の姿を「ドクターカーは + 『数が + 少ないうえ…(ドクターカーは) + 使われている」と、客観的に事例を提示する。なお「という(伝聞)」は、永野賢(1986)に「統一辞と述定辞との両方の機能をもつもの」(「主体的立場の陳述」に含まれる)の例があるため、主体的表

現とした。

(14)では、前件で「システムを守るためには + 措置なのであろう」と、現状を鑑みれば「やむをえない措置なのであろう」と一応肯定する立場をとるが、ダガのあとの後件では「地域金融機関をめぐる現実 + 厳しい」と、個別の事例に視点を移し、前件ではうまく処理できない現実の厳しさを提示する。「厳しい」は、「形容詞の終止形の零記号」であるため、客体的表現とした。

このように提題表現を手がかりにシカシとダガの関係付けの違いを見ると、シカシの方は、提題表現が前件と後件で共通しているため、前件で示した見解に対し、後件では前件を反証するための事例を提示する形となっている。一方ダガの方は、前件と後件では提題表現が異なっているため、前件を一応肯定はしても、後件では必ずしも前件通りには行かない事例を提示する形を取っている。

3・4 主観的見解の表明 — 主観的見解の表明

3・4・1 後件は肯定形

前件を一応肯定した上で、後件では本題とするべき話題を持ち出し、筆者の見解を明確に表明する。ダガの例は観察されなかった。(15)(16)はシカシの例である。

(15) 前外相が外交知識に欠け、外務官僚との摩擦から外交機能そのものが停滞していたのは紛れもない事実だ。田中氏もその責めは負うべきだろう。しかし、だからといって、首相が今回の問題で前外相に詰め腹を切らせたのは筋違いというものだ。(1.31)

(16) 第2次大戦中、友邦米国との協調を訴えてやまない英国のある閣僚が、チャーチルに言った。「米国に友好のキスをしなければなりません」。チャーチルは、こう答えたという。「そう、もちろんだ。しかし片方のほおだけにね」(1.30)

(15)では、前件で「停滞していたのは + 事実だ」と認め、「田中氏も + 負うべきだろう」と、前件の内容を一応肯定した上で、本題とする問題を提示し「詰め腹を切らせたのは + 筋違いというものだ」と、現実の処置について納得できない立場をはっきり打ち出す。(16)では、チャーチルが相手の言い分を「もちろんだ」と一応肯定した上で、シカシのあと、「片方のほおだけにね」

と、全面的には認めない姿勢で反論している。

シカシでは、後件で筆者の明快な立場表明をする「…というものだ・…だけにね」などの断定形式が観察される。上記の他に「具体的に何をやるのか、どんな世界や社会をつくらうとするのかは + 鮮明ではない」などもある。

3・4・2 後件は否定形

前件で話題に対する筆者の見方、見解を述べ、後件では前件だけではない他の可能性を示唆する。ここにはシカシは観察されず、タガのみである。タガの例(16)(17)(18)を例示する。

(17) 文科省は新年度から「学力向上フロンティア事業」と銘打ち、800校を超える小中学校で習熟度に応じた授業を導入する構えだ。だが、習熟度別だけが「個に応じた教育」ではない。同じ教科でも好きな課題を選べるテーマ別や、自学自習、グループ学習を含めたスタイル別など、多様な授業方法を試してみることも必要だろう。(1.12)

(18) やり場のない怒りを背景に、主要国首脳会議などへの抗議行動が暴発する。この怒りはイスラム教徒による過激なテロともどこかでつながっているのではないか。

だが、抵抗の手段は暴力だけではない。カネにはカネを。イスラム世界に広がる独特の金融手法に注目したい。(1.7)

(19) 欧州では新しいおカネが産声をあげた。単一通貨ユーロが年初から流通している。もうマルクもフランもリラもなくなる。これからは国家を超えた「ひとつの欧州」がひとつのおカネを発行する。

ドル支配への対抗は、その重要な動機であろう。だがそれだけではない。二つの大戦を引き起こした欧州は、戦後の廢墟を前に不戦を誓った。欧州統合の道程がそこに始まる。そして、一つの通貨に到達した。(1.7)

(17)では、前件で「文科省は + 構えだ」と、話題に対する筆者の見方を示した上で、後件では「習熟度別だけが + 『個に応じた教育』ではない」と、前件だけでは十分とはいえ、他にも可能性があることを断定する。(18)では「この怒りは + つながっているのではないか」と、まず筆者の疑問を提示し、後件で「抵抗の手段は + 暴力だけではない」と、暴力だけではないことを断言する。(19)では「対抗は + 動機であろう」と筆者の推測を提示し、後件で

「それだけではない」と断言し、後続の文で他の動機を提示する。

いずれも筆者が前件で1つの見解・見方を表明した後、後件では、それだけではない他の可能性があることを断言する。後件の叙述表現は「(だけが) …ではない…だけではない・それだけではない」などと現れる。後件が断定形を取るときはシカシが出現する傾向があるが、ダガの場合は「だけではない」と断言はするが、同時に他の可能性も示唆しているため、強硬な態度より事を構えるのを避けているとも解せる。

3・4・3 後件は疑問形

前件で話題に対する見解を示し、後件で前件から生じる疑問を提示する。(20)はシカシ(1例のみ)、(21)(22)はダガの例。

(20) EUの決定機関の理事会は、国によって持ち票の数が異なる。スペインの8票、オランダの5票などに比べ、イタリアは英独仏と同等の10票とされている。EU内の大国として遇されている格好だが、実際には英独仏の発言力が強く、必ずしも対等に扱われていないのが実情だ。

例えば、同時多発テロに対する軍事行動をめぐってブレア英首相が呼びかけた協議に、当初は招かれなかった。そうした扱われ方に対する不満も、ベルルスコーニ政権のEUへの姿勢に投影されていよう。

しかし、ここは大局を見詰め直し、イタリア国民の豊かな暮らしが、EUという巨大な単一市場を足場に成り立っていることを再確認すべきではないか。(1.14)

(21) 役所にももの申すような団体は、相手にしたくない。外務当局のそういう態度にこの人は同調しているわけだ。だが、そんなことが今の世界に通用するだろうか。(1.26)

(22) 米国だけが国益を優先しているわけでもないし、ブッシュ大統領だけが米国本位というわけでもない。だが、ブッシュ氏の非妥協的な姿勢は、歴代大統領のなかでも際立っているのではないだろうか。(1.23)

(20)では前件で「(イタリアは)・対等に扱われていないのが + 実情だ」「そうした扱われ方に対する不満も + 投影されていよう」と、EU内でのイタリアの立場を把握し、シカシのあと後件で、まず「ここは大局を見詰め直し」と前提を示し、「(イタリアは) + 再確認すべきではないか」と、筆者の見解を

提案する。

(21)では前件で「この人は + 同調しているわけだ」と、まず「この人(筆者注 鈴木宗男代議士を指す)」の態度を押し量り、ダガのあと後件で「そんなことが + 通用するだろうか」と、反語形式で疑問を提示する。そこには当然「通用するわけがない」という筆者の見解が含まれている。(22)では前件で「米国だけが + 優先しているわけでもないし、ブッシュ大統領だけが + 米国本位というわけでもない」と、話題を並立させてそれぞれが特別の事例でないことを表明する。ダガのあと、後件では「ブッシュ氏の非妥協的な姿勢は + 際立っているのではないだろうか」と、そうは言っても特記すべき点ではないかと、疑問を提示する。

シカシでは「…すべきではないか」と、「べき」で疑問を強調的に表明するが、ダガでは「そんなことが…するだろうか(反語)・…しているのではないだろうか」の他に「現実的かどうか、…疑問である」などと現れており、否定形や反語などを伴う形式を取り、はっきりとは明言しかねるという姿勢で疑問を提示する。

3・5 客観的事象の提示/主観的見解の表明 — 条件節 + 主観的見解の表明

前件で過去や現在の事柄、あるいは筆者の見解を提示したうえで、後件ではそれが、ある条件下で否定されたり、実現不可となることがあることを明言する。シカシは(23)(24)、ダガは(25)(26)に例示する。

(23) 農水省は国内に約450万頭いる牛すべてに識別番号を表示した「総背番号制」の年度内実施をめざしている。感染牛が出たとしても、流通ルートや同じ牧場で育てられた牛などを早期に特定でき、混乱の拡大を防ぐことができるというわけだ。

しかし、流通過程で肉がすり替えられたり、生産地のラベルがはり替えられたりすれば、そんな仕組みも意味がなくなる。(1.24)

(24) 何もかもが複雑にからんでわかりにくく、問題解決への道筋が容易に見つからない時代には、人々は確かにリーダーの果断さにすがりたくなる。2人の異常なまでの人気の高さは、簡潔な言葉で端的に言い切る、その語り口によるものでもあろう。

しかし、振り返れば、現実への果断な取り組みの積み重ねが、針路を誤らせた歴史も枚挙にいとまがない。(1.1)

(25) 改革を迫り、政権参加の構えを取ることは、与党を揺さぶる効果はあるだろう。だが、首相にその気がなければ、自民党の抵抗勢力や公明党を政権に引きつけておくためのカードに過ぎなくなる。(1.18)

(26) 波で砂が持ち去られないよう、沖に消波ブロックを置く方法は各地で採用されている。最近は景観に配慮し、海中に潜る離岸堤が造られている。しゅんせつ土砂を浜に運ぶ「養浜事業」も進められている。

だが、自然の復元はよほど慎重にしないと、生態系に影響を与えかねない。行政側は十分な情報を公開し、専門家や住民の声に耳を傾けて対策を講じる必要がある。(1.16)

(23)では、前件でまず「農水省では + めざしている」と、客観的に観察される事実を提示し、続く後文でその理由を「防ぐことができるというわけだ」と説明する。シカシのあとの後件では「すり替えられたり、…張り替えたりすれば」と仮定条件を提示し、「そんな仕組みも + 意味がなくなる」と決めつけている。(24)では、前件で「人気の高さは + その語り口によるものでもあろう」とまずプラス評価で見解を示す。シカシのあと後件では「振り返れば」と確定条件を提示し、「現実への果断な…針路を誤らせた歴史も + 枚挙に暇がない」と、過去の歴史に見る危険性のあることを断言する。

(25)では「改革を迫り、政権参加の構えを取ることは + 効果はあるだろう」と、一応プラスの評価を下すが、ダガのあと後件で「首相にその気がなければ」と仮定条件を提示し、「(改革…構えを取ることは) + カードに過ぎなくなる」と、前件を否定する見解を表明する。(26)では、まず前件で「方法は + 採用されている」「離岸堤が + 造られている」「養浜事業も + 進められている」と、まずプラスに評価される事実を列挙した上で、ダガのあと後件では「慎重にしないと」と仮定条件を示し、「影響を与えかねない」と危惧される点を提示する。

シカシでは、条件のあとに示す見解は「意味がなくなる・枚挙に暇がない」などと、はっきり言いきる形を取るが、ダガの方は「…に過ぎなくなる・与えかねない」など、明言を避け婉曲的に見解を表明する形式が観察される。

3・6 対比的関係

前件で一つの話題を提示し、後件でその話題と対立する話題を示す。対比型をとる。(27)(28)はシカシ、(29)(30)はダガの例を示す。

- (27) 警察庁によると、偽造紙幣の押収は99年以降急増している。昨年は、前年より2千枚以上多い6475枚が押収された。大半はパソコンやスキナー、プリンター、カラーコピー機などを使って比較的簡単につくられたものだ。
しかし、今度の偽札は精巧な印刷技術によるものだ。版下を作って印刷機で大量に刷られた可能性が高いという。警察庁が受けた衝撃は、関係各都府県警の担当者を急きよ集めて異例の捜査会議を開いたことからもうかがえる。(1.21)
- (28) イタリアはEUの原加盟国だ。欧州統合への国民の支持も高い。しかし、中道右派のベルルスコーニ政権は、ともすればEUの大勢に従わず、自己主張を強めている。(1.14)
- (29) 航空会社としては、乗客の安全を考えた対応をしてきたということだろう。だが、障害者から見れば、めったに起こらないことを理由にした不当な制限と映る。(1.28)
- (30) 道路公団への国費投入が首相の指示で中止された以上、官僚たちには当然の選択である。だが、青木氏らにとって、それは官僚たちの突然の裏切りであり、道路財源を牛耳ってきた旧経世会に対する首相の挑発と映ったに違いない。(1.18)

(27)では前件の「(昨年押収された偽造紙幣の)大半は + 比較的簡単につくられたものだ」と後件の「今度の偽札は + 精巧な印刷技術によるものだ」とを対比する。(28)では前件の「イタリアは + EUの原加盟国だ。(イタリアは) + 支持も高い」と後件の「中道右派のベルルスコーニ政権は + EUの大勢に従わず、自己主張を強めている」とを対比する。

(29)では前件の「航空会社としては + 対応をしてきたということだろう」と後件の「障害者から見れば + 不当な制限と映る」とを対比する。(30)では「官僚たちには + 当然の選択である」と後件の「青木氏らにとって + 映ったに違いない」とを対比する。

対比関係が観察される場合、後件の叙述表現は、シカシとダガでは明らかに異なる。シカシでは「よるものだ・強めている」と、断定または客観的に事実を提示する形式を取るが、ダガでは「…と映る・…に違いない」と、明言を避ける形式をとっている。

3・7 その他

これは文中で語と語の関係を示す際に使われている。シカシの例のみでダガの例は観察されなかった。

(31) 地方の衰退なんて言わせない。自分の手で地域に活力を吹き込んでみせる。これが湖国の民の心意気なのだろうか。まだ微々たる力だが、それが社会の実体さえも少しずつ揺らし始めているのである。

地域社会の奥深くで、静かな、しかし確かな変動が起きている。ひょっとしたら日本だけでなく世界規模でも……。 (1.6)

「静かな」で、変動が徐々に進行していく状態と同時に、一時的微弱な現象という予想を読み取ることが出来るが、後件では「確かな」で、一時的微弱な現象なのではなく、確実に手応えあるものであることを強調する。シカシの前後件は、前件の意味に対し後件ではその予想に反する意味を提示する形を取る。

4 まとめ

提題表現と叙述表現を手がかりに、前件と後件とを関係づけるシカシとダガの意味の違いを検討してきた。今回の分析を通し明らかになったことは、二つの事柄の関係付けがシカシとダガでは明らかに相違しており、それは特に後件の叙述表現に顕著に現れてくるという点である。シカシの場合は、後件の叙述表現が肯定形や断定形（推測形を含む）で現れることが多く、筆者は自己の見解を断定的に表明する姿勢をとっていることが読みとれる。ところがダガの場合は、否定形や婉曲的表現を取ることが多く、明言を避け譲歩的に見解を表明する姿勢が読みとれる。また提題表現の違いも前件と後件との関係を考察するには有効な手がかりになることがわかった。先述したようにシカシとダガは社説で抜群に頻度の高い逆接型の接続表現であるが、両者の意味関係の相違は、特に後件の叙述表現との対応から確かめることができるのではないかと考える。

ただ今回は分析の観点を確立させることを目指して、1ヶ月分を対象として意味分析を行っただけなので、ここでの分析の観点が範囲を広げた場合、他のジャンルも含めて、妥当か否か検証する必要がある。また今回は主に先行文と後続文との関係を考察の対象としたが、機能領域を手がかりに、シカシとダ

ガでは文章を展開する機能に相違があるかどうか、考察する必要もあると考えている。

5 補遺 逆接型のデモ

補遺として、逆接型のデモについて触れておく。田中章夫(1987)によると、文体上デモは話し言葉で使用される接続詞に分類される。社説では7回確認され、その内訳は、1月14日が5回、1月5日と6日が各1回となっている。

14日の5回は「『ことづけ』伝えて 成人の日」に出現する。この社説は成人式を迎える若者向けに書かれた筆者からのメッセージで、です・ます調を用いて若者に語りかけるような口調で書かれている。デモが最初に出現するのは、「二十歳の原点」の著者、高野悦子を紹介する箇所、「おちゃめだが、繊細。でも、『父、母、姉、弟、みんな自分の意志で生きているつもりが、操作されているのではないか』。強い懐疑心の持ち主でした。」とある(下線部は筆者が付す)。ここを初めとして、「でも、彼女はその先端にいたわけではありません。」「でもあなたたちにも、大人であることを嫌でも自覚せざるを得ない時が訪れます。」などと、1051字の中にデモが5回も繰り返し使われているのである。この社説では逆接型はデモのみで、シカシとダガは一例も出現しない。

1月5日「この気概と創意に続こう 今日より明日を：4」では、「いつ死ぬかわからない。でもアフガンの土の家に寝ている病人はどんな気持ちかと思う。」と、鶴見和子氏の談話を引用した部分に出現する。地の文では逆接型のダガが1回出現する。

1月6日「町のおカネに夢を託して 今日より明日を：5」では、文章の結尾部、最後の段落に相当するところで、筆者がコメントを述べている部分に出現する。「北から南から、日本の町・村に広がる地域通過はまだささやかな試みに過ぎない。でもこの通貨からは、明日を求める住民の心の鼓動が聞こえてくるような気がする。その響きに耳を澄ましていきたい」とある。この社説では他の箇所で、シカシ1回、ダガ2回が観察される。

14日は若者に語りかける口調の話し言葉的文章であり、5日は談話を引用した部分であり、いずれも話し言葉的性格が強い文章中での使用となっている。それに対し6日は、常体で書かれた文中での使用であり、先述したようにデモの他にシカシとダガも出現するような、明らかに書き言葉でのデモの使用例と言える。社説のような客観性を重んじ、論理的構成を旨とする文章にデモが出

現する珍しい例と言えよう。ただ出現する部分を検討すると、シカシやダガは「静かな、しかし確かな変動が起きている。」「だが、抵抗の手段は暴力だけではない。」「だがそれだけではない。」というように、状況を客観的に説明したり、「…だけではない」と明確に断定したりする箇所であるが、デモの出現する部分は、「…てくるような気がする」と感想を漏らしており、明確に意見を主張するのではなくいわば個人的心情を表出している部分とも受け取れるのである。デモは森田(1977)によると、「女ことばは『でも』を用い、『だが』は使われない」(79頁)とあるが、このように心情を表出する部分には、社説でもデモを使用することがあるということが確認されるのである。

(注1) 【ケーススタディ文章・談話】(佐久間まゆみ担当)に、接続表現とは「主として接続詞や接続助詞、および、それに相当する機能を持つ語句(副詞・名詞・連語等)や文等を一括して、「接続表現」と呼ぶことにしよう」とある。本稿ではこれを参考に、「接続表現」を用いる。

(注2) 湯本昭南(1989)「『ことばの科学』第2集の発刊にあたって」3頁

<参考文献>

- 1 赤羽根義章 1996「逆接の接続詞の意味用法-前件と後件のムードとの関わりから-」『新しい国語教育の基層 長尾高明先生華甲記念論集』長尾高明先生華甲記念論集刊行会 編集・刊行
- 2 市川孝 1978『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 3 市川保子 1999「複文の発話における接続語の選択基準-逆接表現を中心に-」『東京大学 留学生センター紀要』第9号
- 4 岩澤治美 1985「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56 日本語教育学会
- 5 沖裕子 1995「接続詞「しかし」の意味・用法」『日本語研究』15号 東京都立大学国語学研究室
- 6 北野浩章 1989「『しかし』と『ところが』-日本語の逆接系接続詞に関する一考察-」『言語学研究』第8号
- 7 小林賢次 1996『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 8 佐久間まゆみ 1983・9「文の逆接-現代文の解釈文法と連文論-」『日本語学』VOL. 2
- 9 佐治圭三 1987「文章中の接続語の機能」『国文法講座 6時代と文法-現代語』明治書院
- 10 佐竹久仁子 1986「『逆接』の接続詞の意味と用法」宮地裕編『論集 日本語研究(一)現代編』明治書院

- 11 田中章夫 1987「接続詞の諸問題－その成立と機能－」『研究資料日本文法 4』
明治書院
- 12 多門靖容 1992・4「文章の談話分析－「しかし」前後件の後続展開調査－」
『日本語学』VOL.11
- 13 塚原鉄雄 1969「連接の論理－接続詞と接続助詞」『月刊文法』2-2 明治書
院
- 14 寺村秀夫他編 1990『ケーススタディ 日本語の文章・談話』
- 15 時枝誠記 1950『日本文法 口語篇』（岩波全書114） 岩波書店
- 16 永野賢 1986『文章論総説』 朝倉書店
- 17 仁田義雄 1985「文の骨組み－文末の文法カテゴリーをめぐって－」『応用言語
学講座 第1巻 日本語の教育』明治書院
- 18 比毛博 1989「接続詞の記述的な研究」『ことばの科学2』むぎ書房
- 19 北條淳子 1994「接続の語について－逆接の語を中心に－」『早稲田大学大学院
文学研究科紀要 文学・芸術学編』40号
- 20 宮地裕 1983・12「二文の順接・逆接」『日本語学』VOL.2
- 21 森岡健二 1973「文章展開と接続詞・感動詞」『品詞別日本文法講座6 接続詞・
感動詞』 明治書院
- 22 森田良行 1980『基礎日本語2』角川書店
- 23 森田良行 1995『日本語の視点』創拓社